



# XHAREN COLOSSEUM

ハーレムコロシアム

小説 竹内けん

表紙 浅沼克明

挿絵 すてりい

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





## クレイモア

大剣を担ぎ農村ミントを飛び出した大男。天下無双を目指している。

## ユング

黄金の鎧とその素早さから「雷神」の異名を持つ現女部門チャンピオン。

## シャギー

クレイモアと同じ日にデビューした地元の女剣闘士。鞭を使い変幻自在に戦う。



# 登場人物紹介

Characters



## チカ

クレイモアを一途に慕う幼なじみ。  
田舎者で地味ではあるが、家庭的  
でよい伴侶になるタイプ。

## ディアドラ

隻眼の美女。元女部門のチャンピ  
オンで、貴族の地位は金で買った。



## ミーシャ

クレイモアの大ファン。王立  
ホワイトホースに通うお嬢様。  
積極的な美少女。

第一章	デビュー戦
第二章	二回戦
第三章	三回戦
第四章	四回戦
第五章	エキシビジョンマッチ
第六章	チャンピオンシップ

からかわれたディアドラは、拗ねたように応じる。

「バ・カ……♪」

その妙に溜めた一言に、クレイモアは心を驚掴みにされる。

(カッコイイイ姐さんだとばかり思っていたのに、こんな表情されたらたまらん)

逸物へといつきに力が入る。そこにディアドラが提案してきた。

「ショーツ、ぐちよぐちよで気持ち悪いわ。早く脱がせて」

「え、これ……脱がしていいのか？」

思わず聞き返してしまったクレイモアに、股ぐらがぐつちより濡れたショーツと、ガーターベルトと、眼帯だけの美女は呆れる。

「脱がさないと始まらないでしょ」

「そ、そうだな」

女に操られるがままに、クレイモアは震える手を、セクシーな下着の左右の腰紐にかけた。

ガーターベルトの上から穿いているので、そのまま下ろせばいい。

ディアドラは腰を上げて協力してくれたので、ショーツはあっさりと下ろされる。

ヌラーツと股間とショーツの生地の間で粘液の糸が引いた。

引き締まった左右の足首から布を抜くと、背後に投げ捨てて、改めて両足首を持って、

M字に押さえつける。

(すげえ、オマ○コから尻の孔まで丸見え)

どんなにカッコイイ女でも、やんごとなき身分の女でも、究極のところは牝でしかないのだ、と思い知らせてくれる光景である。

(これがディアドラさんのオマ○コ、やっぱり大人の女って感じがするぜ)

指マンを施したあとだからだろう。亀裂は開き、褻が乱れている。膣孔もぼつかりと姿を露呈させていた。

全体的に黒っぽいのは、単に日焼けしているからなのか、年齢的なことなのか、それとも使いこんでいるからなのか。

とにかくエロい。この陰唇に比べたら、チカの陰唇などまだまだガキという気がする。

「あんまり、そこをじろじろ見るものではないわよ」

「あ、すまん」

我に返ったクレイモアは思わず謝罪する。

ディアドラは苦笑しながら先を促す。

「まあ、謝るようなことじゃないけど……そろそろ、お願い」

「えっ……」

思わず硬直するクレイモアに、ディアドラは笑いながら色香を振りまく。



「おまえのぶつといちんぼ、い・れ・て♪」

セクシーな女のおねだりを受けてクレイモアは、身の毛がよだつほどの興奮に晒された。「し、しかたねえな……」

クレイモア自身が入れたくて仕方なかったのだが、行動に移すのが気恥ずかしくて、固まっていた。

そこに水を向けられたのだ。

クレイモアの中の理性はいつきに崩壊する。逸物が破裂しそうなほどに血液が集まり、天を衝かんばかりに反り返る。

いまなら、最強の盾とて貫ける気分だ。

チカるときは、入れる前に暴発させてしまったわけだが、今回はディアドラの口で一発抜かれているから、その心配もなさそうだ。

こういうところが、経験豊富な大人の女の知恵なのだろう。

「さあ、いらつしゃい」

ディアドラは右手の人差し指と中指で、陰唇を開いてみせた。

濡れた膣孔がヒクヒクと開閉しながら、物欲しそうに男を待っている。

「ここよ。ちゃんと入れられる？」

その小馬鹿にした態度が、癩に触る。

「ディアドラさん、あんまり俺を舐めたらダメですよ。ひいひい言わせますからね」

「ふふん♪ それは楽しみ。せいぜい楽しませておくれ」

挑発に乗ったクレイモアは、勇んで逸物を持ち突撃した。

ズボッ。

狙いたがわず肉の巨剣は、ディアドラの股間を貫く。

「あ、でっかい♪」

のけぞり歓喜の悲鳴を上げたディアドラは両手で、クレイモアの太い首を抱きしめ、さらに両足を尻に絡めてきた。

(こ、これが女の中……すげえ気持ちいい♪)

濡れた柔らかい贅肉に、逸物が余さず包みこまれた。

中身がザワザワとうごめく。

捕食された。この態勢からはもはや逃げられない。

(いや、どんな鉄壁の盾とて、真正面からぶっ壊してみせるぜ)

勇を鼓舞したクレイモアは、腰を引き、そして、抜けきる寸前のところから、ドスンッと押し込んだ。

「あっ！」

大口を開けたディアドラは艶やかに背筋をのけぞらす。

(くうく気持ちいい。でも、効いている。女も気持ちいいわけか……)

それと察したクレイモアは、調子に乗って腰を前後させた。

ズボツ、ドスンツ、ズボツ、ドスンツ!

初めこそ恐る恐るであったが、次第に慣れてきて、腰の動きは素早く、力強くなる。なにせ身体を動かすのは得意中の得意だ。

たまらずディアドラは、両手でクレイモアの両肩を強く握る。

「ちよ、奥に、奥にあたつちやつている。ズンズンって凄い、こんなの初めて♪」

「俺はその辺の男とは違うからな。世界一の強者のちんぽだ。普通じゃねえぜ」

女の手管に乗せられている、などと露ほども考えなかったクレイモアは、ディアドラの言葉に乗せられて調子づく。

「オラッ、オラッ、オラッ」

夢中になって腰を使う。

ズコズコズコズコ……ガツン! ガツン! ガツン!

互いの恥骨がぶつかり合い、子宮口を突きまくる。

「ああん、奥はダメ、奥をそんなにガンガン突かれたら、あたし、あたし……」

滅多突きにされたディアドラはのけぞり、豊かな乳房をバインバインと上下させて、男の視覚を幻惑する。

なんかよくわからないが、奥をガンガン突かれるのがいいらしい、と察したクレイモアは、雄叫びを上げて、荒々しく腰を使い、とにかく力の限り腰を振りまくった。

「うおお!!! まだまだ!!!」

ガツン、ガツン、ガツン!

さながら破城槌が打ち込まれるように、女の子宮口は撃ちすえられる。

「ひい……、ひい……、ひい……」

若い男の極限までに鍛えられた肉体の放つ、破壊的な連続突きである。

余裕ぶっていたディアドラも、いつしか白目を剥いて、涎を噴く。

強く逞しかった女傑も、こうなってはただの牝である。完全に牝と墮した女の顔というもの、クレイモアは初めて見た。

(うわ、だらしのない顔。女ってチンポを味わっているときこんな表情をするのか。すげえ

色っぽいぜ)

普段、カッコイイ女だけに、ギャップが凄い。

それをしているのが、自分の逸物だと思うと、誇らしい気分とともに、征服欲が湧く。

男が女を征服する。その行きつくところはすなわち、膣内射精。

クレイモアの逸物で、どうしようもない射精欲求が高まってきた。

(でも、すぐに出すのは格好悪いからな。精一杯我慢して、もつとディアドラさんを乱れ

させてから出す。そのほうがきつと効果的だ)

決意を新たにしたクレイモアは、射精を必死に我慢しながら、破壊的な腰使いを続けた。「ひい、凄い、凄いの！　こんなのダメ、気持ちよすぎる。お願いもう限界。耐えられない！　耐えられないの！　お願い中に出して、いっぱい出して」

クレイモアの限界に、タイミングを合わせたかのようにディアドラが、切羽詰まった牝の懇願をしてくれた。

おかげでクレイモアは遠慮なく欲望の籬を外した。

「いくぞお、うおおおおおおおお!!!」

雄叫びを上げたクレイモアは、逸物を思いつきり押し込み、亀頭部を子宮口に押し付けた零距离で射精。

ドクン！　ドクン！　ドクン！

「あ、ああ、ああ……熱い、熱いものが入ってくるのおおおおお!!!」

いくら大人の女とはいえ、いや、熟れた女であるからこそ、ディアドラの裸体は劇的に反応した。

ヒク、ヒクヒク……。

背筋を弓なりに反らしたディアドラはさながら、股間から太い槍をぶち込まれ、穂先が口から出たかのように、大口を開けて痙攣していた。

なんとも豪快な艶姿である。

まさに女を抱き、犯し、落としたのだ、と男に納得させてくれる痴態だ。

やがて反り返らせていた背中を落としたディアドラは、ぐったりと脱力する。

「ふう……」

思いつきり射精して満足したクレイモアも、思いの丈を吐き出した逸物が小さくなったところで引き抜く。

ヌチャ……。。

「ああ……」

満足げな吐息をついたディアドラは、手で軽く顔を隠しているが、足腰の力が入らないのか、大股開きのままである。

おかげでクレイモアの視界には、男にやられた直後の女性器が丸見えだ。

逸物が抜けても膣孔は大きく開いたままであり、中からドロドロ口と白濁液を溢れさせた。

（これが男にやられた直後の女の艶姿か……：すげえ色っぽい）

魅入っていると、ディアドラは両手を伸ばし、クレイモアを無理やり抱き寄せてきた。

「やったあとにすぐに離れるのはマナー違反よ」

「ああ」



「ふむ」

ユングは考えるように、クレイモアの顔を見る。

「どうやら、ユングも同じ疑問を感じていた、ということらしい。」

クレイモアとユングの戦い方はなぜか通じるものがあると。

ユングはそつげなく答えた。

「セラフイム殿だ」

「男部門のチャンピオンか」

残念ながらクレイモアは、まだ面識はなかった。

一般的な闘士たちから見ると、憧れの存在であり、雲の上の存在であろう。

男部門のチャンピオンと、女部門のチャンピオンでは、動く金が違う。

詳しいことはクレイモアも知らないが、おそらく十倍以上、あるいは百倍ぐらいの収入

の差はあるだろう。

「わたしは闘士としてデビューする前に、まだ無名だったセラフイム殿に戦い方を習った」

「なるほど。それじゃ弟子である先輩に圧勝した俺は、チャンピオンに勝ったも同然だな」

「馬鹿か貴様はっ！ セラフイム殿はわたしなんかと比べ物にならないほどに強いっ！」

クレイモアの軽口に、ユングは激怒する。

「師匠をバカにされて怒らない人はいないだろう。」



クレイモアは、ユングの口を手で塞ぐ。

「声が大きいです」

「うぐ、済まなかった。それよりも、おまえ、わたしの尻にないを押し付けている？」

「い、いや、そのやっぱり、こんな狭い場所で、先輩の匂いを嗅いでいたら、たまらな  
いといえますか……あはは」

クレイモアのいきり立つ逸物が、ユングの尻の谷間に嵌っている。むろん、間にはいく  
つかの布があるが、温もりは感じる。

「き、貴様という男は、どこまで無節操なんだ……」

ユングは右手で握り拳を作りプルプルと震える。

「いや、だから、先輩みたいな美人とこうやって密着していたら、大きくなってしまふの  
は男として不可抗力といえますか」

「ミーシャちゃんは何でこんな女とみればだれかれ構わず発情する野獣に惚れたのか理  
解に苦しむ……あん、こらまた」

「すいません。その目の前にこのすばらしいおっぱいがあったらやっぱり揉みたくなると  
いうか」

クレイモアは再び背後から抱きしめると、今度は両腕を脇の下から入れて、乳房を掴ん  
だ。

左の乳房はすでに露出していたが、右の乳房は黄金の胸当てに包まれている。しかし、縦に吊るされたブラジャータイプのため、脇乳丸出しであり、横から簡単に手を入れることができた。

「や、やめろといっているのに……」

尻の谷間に男の昂りを感じながら、背後から抱きしめられ、両の乳房を揉みしだかれたユングは、抵抗できなくなってしまうた。

女は背後から抱きしめられると弱い。これは女遊びをしている男ならわかるテクニクだ。

ユングの心のガードが緩くなってきた、と察したクレイモアは、手の中で乳首がニョキニョキッと突起してくるのがわかったから、そこを集中的に扱く。

「うむむ……」

ユングは必死に喘ぎ声を我慢する。

その表情がなかなか色っぽく、男の挑戦心を煽った。

(このカッコイイお姉さまに、ぜひとも牝の表情をさせてみたい)

そんな牝欲に晒されたクレイモアは、首を伸ばし、ユングの首を後ろに握じらせた。

そして、有無を言わずに唇を奪う。

「うむっ!!」



ユングは驚いたように目を見開いたが、この狭い空間の中、逞しい腕に背後から抱きしめられて逃げることは不可能である。

「う、うん、ふむ……」

唇を合わせているだけでは物足りず、口を開いて唇を舐め回す。さらに強引に肉門を割って舌を入れ、前歯を舐める。

女にしては大きな歯で、ツルツルしている。

さらに無理やり口を開けさせて、口内を舐め回す。

特に上顎の縫い目をなぞる。ここが女の性感帯の一つであることをクレイモアは承知していた。

「うむむ……」

案の定、当初は乗り気ではなかったユングも気持ちよさそうに鼻を鳴らす。

それから舌を搦め捕り、絡み合わせながら、勃起している乳首を中心に両の乳房を揉みしだく。

ビク、ビクビク……。

しつこく尖った乳首を抜きあげられたユングは、軽い絶頂に晒されたのだろう。身体から力が抜ける、それと察したところで右手を下半身に下ろしていく。

ユングの下半身は黒いローレグのハイレグパンツに包まれていた。試合用のいわゆる

見せパンというやつだ。ユングの格好良さを演出するために、ブーメランのように鋭角なハイレグラインをしていた。

その中央をクレイモアの無骨な太い指が捕らえる。

「う」

薄い布の表面を人差し指と中指と薬指の三指で押さえると、激しく前後に擦る。

「うぐ……」

クレイモアの口内に吸引されていたユングの舌がヒクヒクと痙攣している。

しかし、逃がさずに強く吸う。

過激なハイレグパンツの左右の足孔から透明な蜜が漏れ出し、逞しい内腿を濡らしている。

「うぐぐぐぐ……」

ビクビクビク！

ユングの逞しい肢体が激しく痙攣して、絶頂したことを確認したクレイモアは、吸い上げていた舌を解放してやり、接吻を終えた。

「はあ……はあ……はあ……」

唾液で顎を濡らしながら、荒い呼吸をするユングを、クレイモアはからかってやる。

「先輩、こういうことはあまり慣れていませんね？」

「煩い。おまえみたいな色魔と一緒にするな」

まあ、それはそうであろう。これほどの美闘士だ。ギャンブレーに限らず言い寄ってくる男は事欠かないだろうから、そこそこの経験はあるのだろうが、クレイモアほどに遊んでいることは絶対にならないだろう。

ユングは恥ずかしそうに頬を染めながら、上目遣いに睨みつけてきた。

「その……一発だけだぞ」

「え？」

わざとらしく聞き返すクレイモアに、不本意そうに顔をしかめたユングは、左手の腕を右手で押さえながら応じた。

「そんなにやりたいなら一発ぐらいならやらせてやる。さっきの試合で、わたしに勝てたらやらせてやるという約束だったしな。それにわたしは、自分より強い男にやられるのなら、文句はないのだ」

「さすが先輩、話がわかる」

クレイモアは嬉々として、ユングの唾液に濡れた顎から、首筋に下ろし、鎖骨の三角のくぼみに接吻。

「ただし、ミーシャちゃんには内緒だからな。貴様とやったなどということがミーシャちゃんに知られたら、わたしは……」

「はいはいわかっていますよ」

シスコンとしては、大事な妹の恋人と肉体関係を持つことは精神的に憚られるのだろう。調子よく合わせながらクレイモアは、二の腕を上げさせて脇の下に顔を突っ込む。

普段、脇の下の見える衣装で試合をしているのだ。手入れが行き届いており、脇毛の痕跡すら感じさせないツルツルの脇の下だった。

しかし、激しい運動をしたあとだけに、爽やかな汗の匂いがこもっており、否応なく牡の性欲を煽る。

クレイモアは舌を伸ばし、ペロペロと舐めた。

「あはっ、やめろ。くすぐりたい」

悶えるユングの左右の脇の下を存分に堪能したから、クレイモアは黄金の胸当てに手をかけた。

左の胸当ての肩紐は切れているから、見事な球形の乳房は露出している。頂を飾るピンク色の乳首が眩しい。

クレイモアは右の乳房を覆う黄金の胸当てを外にずらし、二つの乳首を眼前にして目を細める。

(改めて見ると本当に綺麗な乳首。まるで飴細工みたいだ)  
生唾を飲んだクレイモアは、両手でそれぞれ量感たっぷりの乳房を驚掴みにすると、そ

「キヤツ、クレイモアのエッチ。変態。ドスケベ。あん、あなたたちもやめなさい」

「そういう色っぽい反応をしたら、みんなにばれるわよ」

シャギーの忠告に、チカは身を固くする。

いまはパレードの最中、沿道には万余の観衆がいるのだ。

オーブンタイプの馬車とはいえ、腰の高さぐらいを覆う仕切りはある。そのため陰になつて観衆には見えないだろう。

それをよいことにミーシャとシャギーは、片手でクレイモアの逸物を扱きながら、もう一方の手をチカのスカートの中に入れてまさぐる。

「あ、ダメ、そこダメ……」

オーブン馬車の上、クレイモアに背を預けて座っているチカには、逃げたくとも逃げ場所などない。

羞恥にピクピク震えながら、同性の愛撫に耐える。

そのさまがどうしようもなく可愛い。否応なく牡欲を煽った。

ミーシャもシャギーも、クレイモアの乱れた性生活に積極的に参加してきたから、女を弄ぶのも得意である。

「ダメダメ言っているわりには、濡れてきたわね」

「うん、これだけ濡れれば入れられるでしょ」



ミーシャとシャギーが頷きあう。

「ちよ、ちよつとウソでしょ。こ、ここで入れる？」

「そ、嬉しいでしょ。衆人環視の中で、自分だけクレイモアさまのお大事を独り占めにできるのよ」

「せーの」

ミーシャとシャギーは協力して、小柄なチカの腰を上げさせると、後ろに移動させる。

スカートの中に、クレイモアの巨根が隠れる。

ズボリ！

「はぐっ」

勝手知ったる女体である。スカートに視界を遮られ、沿道に向かって笑顔を振りまきながらであっても、狙いたがわず逸物はチカの身体を貫いた。

ビクン！

最深部まで貫かれたチカは身体を固くする。

レズ責めによつて、チカの小さな蜜壺はすでにしっとり濡れそぼっていた。

（ヤバ、そういえばチカはカズノコ天井の名器の持ち主。このオマ○コの中に入っていると寛げない）

あっさりとイッてしまうのは男として情けない。もし、それが沿道にばれたら、クレイ

モアは身体の大きいだけの早漏野郎というレッテルが張られる。

それだけは男として避けたい事だ。

一方チカのほうも、身を固くしてヒクヒク痙攣している。

「あら、チカったら、入れられただけでイッているみたい」

「口では偉そうなこと言っているけど、その実、クレイモアさまのおちんちん大好きな淫乱娘だからね」

シャギーとミーシャは、顔を真っ赤にして身体を固まらせているチカの左右の耳元から、囁きからかう。

「くっ……」

チカは身をますます固くして耐える。

(チカ、締めすぎ。ただでさえ狭いのに、ちんぽが握り潰される)

コンパクトサイズなのに、男を楽しませるという意味では凶悪。山椒は小粒でもピリリと辛い。そんな膣孔の中に入って、クレイモアは特に腰を動かしてなどいないが、カラコロカラコロと車輪が回る動きに合わせて、振動が身体を動かす。

ビクッ、ビクッ！

チカの小さな身体が痙攣している。

そんな必死に耐えるチカの耳元で、ミーシャは意地悪そうに囁く。

「笑顔、笑顔。いまパレードの最中って忘れてはダメよ」

チカとしては忘れたかっただろう。しかし、あたりに意識を巡らせれば、万余の人が笑顔で手を振り、華吹雪や紙吹雪を撒いている。

「うわああああ」

歓声にクレイモアは腕を振るい、その胸に抱かれたチカにも否応なく視線が集まる。顔を真っ赤にしたチカは、必死に笑顔を浮かべて、小さく手を振る。

「あん、やつぱり羨ましいかも」

「あたいも、ちんちん欲しくなってきたやつた」

ミーシャとシャギーは発情しきった顔で、身をくねらせ、チカの顔を見ながら、手をスカートの中に入れて、男女の結合部、おそらく淫核を弄っているようだ。

「ひい、ああ……」

必死に平静を装おうとするチカの口元が半開きになり、涎が垂れる。

女には被虐の欲びというのがある。ダメだ、ダメだと思うほどに感じてしまうのだろう。まさに究極の露出プレイ状態だ。

「あ、もうダメ、声でちゃう。ああ……みんなにばれちゃう」

狭い膣孔がキュッキュッと逸物を締めあげてくる。

「わたくしも早くおちんぼ欲しい」

「あたかももう我慢できない」

ミーシャとシャギーは、あたりの視線も憚らず、クレイモアのほうを向くと、その太腿にそれぞれ跨がり、自らの股間を擦りつける。

片手でクレイモアの胸板を撫でまわし、乳首を舐めるように顔を押し付けつつ、もう一方の手を、チカのスカートの中に入れて、肉袋や淫核をマッサージュしている。

「まったく、ところ構わず発情しちまうんだな。おまえらは……」

「だって、クレイモアの女だもん」

「そうそう、わたくしはクレイモアさまの女であることをまったく恥じていませんわ。いや、誇りですもの。だれに見られたって構いません」

シャギーとミーシャの言い分に、苦笑しながら、クレイモアは左右のディアドラとユングの腹部に回した腕を下げて、股間に手を添える。

「あん」

「もう」

ディアドラもユングも仕方ないわね、と言いたげな苦笑を浮かべたあと、何事もなく沿道に向かつて笑顔で手を振り続けた。

二人とも、前女チャンピオン、現女チャンピオンに相応しく、堂々たる振る舞いだが、その実、クレイモアの顔に押し付けられている乳房の頂は、衣装の上からでもわかるほど

に勃起しているし、股間もヌルヌルだ。

彼女たちも被虐というか、露出の歓びを感じてしまっているのだろう。

沿道の観衆が、馬車内の痴態に気づいているのか、いないのかはわからない。

馬車は常に移動しているから、違和感を覚えても、確信を持つ前に通りすぎてしまっていることだろう。

もつとも、馭者は確実に気づいていると思われる。

「チカ、そろそろ出さずぞ」

「え、こんなところで……だめ……」

「もう我慢できねえ」

そう嘯いたクレイモアは、手にしている左右のお姉さまたちの股間を、シヨーツ越しに激しく扱く。

「ちよ、ちよつと、わたしたちまで一緒にイカそうとしなくても……」

「くっ、もう、だめ、イっちゃう」

表面上はポーカーフフェイスを装っていたユングが、先に弱音を吐いた。

「あん、わたくしも一緒にイキますわ」

「あたいも、一緒にイク」

クレイモアの胸に顔を埋めたミーシャとシャギーも、激しく腰を動かし、自らの股間を

クレイモアの太腿に押し付ける。

多くの観衆が歓声を上げる、目抜き通りの真ん中で、巨大な馬車にそっくりかえったクレイモアは、牝の匂いに包まれる。

「あ、ダメ、ビクビクしている。ビクビクしているの!!」

男の生殖器を体内に咥え込んでいるチカは、爆発の予感に身を固くし、赤ん坊のように両手を握りしめる。

「イクぞ！」

宣言と同時に、クレイモアはグンツと腰を上げた。

「ひぎい」

「新チャンピオンおめでどう」

沿道のつきぬ歓声の中で、宣言と同時に、クレイモアは射精した。

ドビュビュビュビュビュ!

「あ、らめ、入ってくる。入ってくるのおおお」

衆人環視の中で膣内射精をされたチカは、必死に平静さを装おうとしていたようだが、射精が始まったと同時に頭の中が真っ白になってしまったようだ。

惚けた表情で口を開いている。

チカほどではないが、ミーシャも、シャギーも、ユングも、ディアドラも軽い絶頂に達



してしまったようで、クレイモアの身体にそれぞれ抱きつく。

※

「まったく史上最底のパレードだったわね」

祝勝会を終えて、クレイモアたち一行は、意気揚々と帰宅する。

ディアドラは疲れたと言いたげに溜息をつく。

それにユングも同意する。

「チャンピオンになった記念パレードの最中に一発やった男なんて、前代未聞だな」

チカは憤慨して叫ぶ。

「あんな恥ずかしい思い、二度と御免だからね」

「あはは、ごめんごめん」

さすがにチカに対しては少し悪いことをしたと思ったクレイモアは、その頭をポンポんと叩いて謝罪する。

「そんなことより、早く続きをしましょう。わたくし、もう我慢できませんわ」

「あたいも、早くちゃんぽ食べたい」

ミーシャとシャギーは、跳ねるようにして促す。

「わかったから、そう騒ぐな。あと少しの辛抱だ」

クレイモアが玄関の扉を開けた瞬間である。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム系作品は、完全の方向転換でござります。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!